

【研究ノート】

数詞と結合する二字漢語サ変動詞について

田中 佑

要 旨

日本語には、「3 回転する」「3 連勝する」「3 往復する」のように、二字漢語サ変動詞が数詞と結合する表現が存在する。二字漢語サ変動詞については、これまで、様々な角度から研究成果が蓄積されているが、このような現象を扱った研究は未だ見られない。以上を踏まえ、本稿では、研究の第一段階として、数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞の抽出を試み、数詞と結合することで生じる文法的性質の変化という観点からの観察を行った。結果、26 の「数詞と結合する二字漢語サ変動詞」が抽出され、①ヲの挿入が難しくなる、②助数詞化といった現象が観察された。

キーワード

二字漢語サ変動詞 数詞 コーパス ヲの挿入 助数詞化

1 はじめに

日本語では、以下のように、二字漢語サ変動詞が数詞と結合する場合がある。

- (1) a. 時計回りに回転する。
b. 時計回りに 3 回転する。
- (2) a. 開幕戦から連勝している。
b. 開幕戦から 3 連勝している。
- (3) a. 駅と大学の間を往復する。
b. 駅と大学の間を 3 往復する。

(二字)漢語サ変動詞に関する記述的研究については、これまで、その内部構造(日向 1985、野村 1999 など)、意味の分布(廣濱 1965,1966 など)、自他(金 2006、楊 2011 など)など、様々な観点からの考察が積み上げられている。しかし、小林(2005)が指摘するように、漢語サ変動詞の意味・用法が十分に記述されているとは言い難い。実際、上述の現象を扱った研究は未だ見られない。

以上を踏まえ、本稿では、上記の現象へのアプローチの第一歩として、数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞の抽出と、数詞と結合することで生じる文法的性質の変化という観点からの観察を行う。

2 数詞と結合する二字漢語サ変動詞の抽出

2.1 手順1: 『分類語彙表 増補改訂版』から二字漢語サ変動詞を抽出

数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞を抽出する作業の第一段階として、日本語に存在する二字漢語サ変動詞の一定量の確保を目指した。作業としては、国立国語研究所(編)『分類語彙表 増補改訂版(CD-ROM版)』から二字漢語に「する」が後接している表現を抜き出すことで、二字漢語サ変動詞の抽出とし、結果、6,779語を得た。なお、作業の多くを機械的に行っているため、以下のような語が含まれたり、含まれなかったりする。また、「得点する/3得点する」のように、数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞でも、『分類語彙表 増補改訂版』で「体の類」にのみ登録され、「用の類」には記載されていないものは抜け落ちているが、今回は対象外としておく。

○漢語以外で含まれているもの

【和語】 長居、割引、近道、家出、厚着、早道、遠出、遅出、門出、船出、早出、下煮、宵寝、朝寝、共寝、早寝、空寝、昼寝、味見、下見、長湯、割引、凸凹、相对、相接、相反

【湯桶読み】 手配、下訳、毒見(毒味)

【重箱読み】 着荷、楽寝

○表記の問題で除外されているもの

あんばい(塩梅)、もうろく(毫碌)、けが(怪我)、ひいき(鼻肩)、あんま(按摩)、けいれん(痙攣)

○一語として扱っているもの

憤怒(ふんど/ふんぬ)、施行(しこう/せこう)、重複(ちょうふく/じゅうふく)、など

2.2 手順2: 『聞蔵II ビジュアル』を用いて用例を検索

読売新聞社が提供する検索システム『聞蔵II ビジュアル』を用いて、2001年1月1日から2010年12月31日までの10年分の『朝日新聞』(「朝刊」「本誌」「東京発行」)の「本文」を対象に、『分類語彙表 増補改訂版』から抽出された6,779語にアラビア数字「0~9」を付した語(たとえば、「0回転+1回転+2回転…9回転」)をキーワードに検索を行った。なお、「本文」を対象に検索を行っているが、例文抽出の作業の都合で、データには「見出し」の用例も含まれている。

2.3 手順3: アクセントなどに基づく選定

数詞と二字漢語サ変動詞が表面的に隣接はしていても、両者が結合しているとは捉えられないものがある。それらについては次に示す基準により排除した。

(I) 促音化やアクセント合成が起こらないもの

- (4) 場内は 200 用意された座席がすべて埋まり、立ち見のお客さんまで出ている。

『朝日新聞 2005/4/24』

cf. 200 回転 (ニヒャクカイトン/ニヒャッカイトン)

200 用意 (ニヒャク/ヨウイ/*ニヒャツヨウイ)¹

- (5) 経団連には日本を代表する大手企業や業界団体が約 1600 加盟している。

『朝日新聞 2006/12/2』

cf. 1600 回転 (センロツピャクカイトン/センロツピャッカイトン)

1600 加盟 (センロツピャク/カメイ/*センロツピャッカメイ)

- (6) 打率は大会史上最高記録となる昨年の 4 割 4 分 8 厘から 1 割以上下がり、安打数も 24 減少したが、それでも 1 試合平均 7.2 得点は全代表校中 4 位だった。

『朝日新聞 2005/8/22』

cf. 4 回転 (ヨ ンカイトン/*ヨ ンカイトン) する

4 減少 (*ヨ ンゲンショー/ヨ ンゲンショー) する

- (7) 審査の申し立てがほとんどない 50 の審査会を廃止する一方、申し立てが多い都市部には 14 増設し、不均衡をなくすのがねらいだ。

『朝日新聞 2008/1/22』

cf. 4 回転 (ヨ ンカイトン/*ヨ ンカイトン) する

4 増設 (*ヨ ンゾウセツ/ヨ ンゾウセツ) する

※その他：「展開」「制定」「指定」「追加」「低下」「新設」「確保」「削減」

(II) アクセント合成が起こらず、かつ、自然数と共起しない

- (8) 住宅にかかる固定資産税も 1 年間は 3 分の 1 減額する。 『朝日新聞 2007/12/12』

- (9) 快諾すると、その場で日本の戦後や女性の地位について 2、3 質問し、カメラで撮っていった。 『朝日新聞 2002/9/12』

- (10) 消費者心理を表す「消費者態度指数」は、過去と比較可能な「2 人以上の世帯」の値が、前月より 2.7 上昇し、45.4。 『朝日新聞 2004/5/13』

※その他：「向上」「圧縮」「出資」「更新」

¹ 「/」は語境界を表す。

2.4 手順 4: 最終的な対象の選定

以上の手順で得られた語の生起環境は以下の 5 つに大別される。

①助詞(格助詞・連体助詞・とりたて詞など)の直前

- (11) 近鉄は 3 併殺を喫し、開幕からの連勝は 5 で止まった。 『朝日新聞 2003/4/3』
- (12) 水産高校で航海は経験ずみのはずだが、1 年生は最初の 2、3 航海の間、きまって船酔いで七転八倒する。 『朝日新聞 2008/4/20』
- (13) 番組のリスナー予想というのはユニークだが、もう 3 工夫ぐらい必要だ。 『朝日新聞 2007/12/12』

②名詞述語(コンピュータの有無は問わない)

- (14) その材料をつくるのにかかわってきたのがこの 3 施設だ。 『朝日新聞 2007/10/4』
- (15) 4 打数で 1 単打だった伊藤は「やり残したことはありません」。 『朝日新聞 2010/7/29』
- (16) 中日は序盤に立浪が 2 併殺。 『朝日新聞 2005/9/15』

③複合名詞の前項・後項²

- (17) ロッテは 4 連勝どまりで 5 割復帰ならず。 『朝日新聞 2004/4/24』
- (18) そして、東京ドームの開幕 6 連戦が追い打ちをかけた。 『朝日新聞 2007/4/13』

④スル(「する」、過去形「した」、受身形「される」、使役形「させる」、など)の直前

- (19) 時速 130 キロで毎秒 35 回転するカーブの場合、80 センチ程度曲がるという。 『朝日新聞 2007/9/9』
- (20) 2 三振した三番の小川は狙い打ちしたはずの直球がファウルチップになって、首をかしげた。 『朝日新聞 2001/3/31』
- (21) 国防予算は人件費、訓練などの活動費、装備費に 3 分類される。 『朝日新聞 2003/3/6』
- (22) 同社は、羽田空港と 3 月 16 日開港の新北九州空港とを結ぶ路線で、早朝深夜を含め 12 往復させる。 『朝日新聞 2006/1/13』

⑤スル以外の動詞の直前

- (23) それより 00 年最多勝右腕のハドソンから 2 安打放ったことを、イチローは喜んだ。 『朝日新聞 2004/9/30』
- (24) 最新車両 N700 系を 16 編成投入し、11 年度末で全 133 編成のうち 80 編成を N700 系にする計画だ。 『朝日新聞 2010/3/27』

² 複合名詞の前項にある場合はサ変動詞として機能している可能性もあるが、ここではその区別は考えないでおく。

上記の環境のうち、①～③にのみ生起する語については、サ変動詞としてではなく、名詞として数詞と結合していると捉えられるため、以下の議論の対象とはしない。しかし、⑤に生起する語については、名詞と断定できないものも含まれており、検討を要する。よって、以下の議論でも取り上げることとする。

以上の手順を経て得られた語を【表 1】に記す。

表 1 スル・スル以外の動詞の直前に生起する数詞と結合した二字漢語サ変動詞

(A)	スルの直前にのみ生起	完投、敬遠、失策、倍增 ³ 、分冊、分枝、分裂、連投、連破 (9 語)
(B)	スル・スル以外の動詞の直前に生起	安打、往復、回転、完封、区分、公演、三振、盗塁、等分、分割、分類、連勝、連戦、連打、連覇、連敗、連発 (17 語)
(C)	スル以外の動詞の直前にのみ生起	会計、会合、競技、編成、継投、授業、区画、連続、施設 (9 語)

【表 1】のうち、スルの直前に生起可能、つまり、漢語サ変動詞と数詞が結合していると捉えることができる(A)(B)の 26 語が、本調査で得られた数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞のリストということになる。

3 数詞と結合することで生じる文法的性質の変化

本節では、数詞が結合することで二字漢語サ変動詞の文法的な性質に変化が生じるのかについて観察を行う。具体的には、ヲの挿入、および、助数詞化という現象について取り上げる。

3.1 ヲの挿入

単独では「-スル」「-ヲスル」(もしくは、「-ニスル」)のいずれの環境にも生起できるにもかかわらず、数詞と結合することで、「-ヲスル」が許容しにくくなる語が確認された。2.2 節に記した調査で扱ったものと同様のテキストについて、「-さ、-し、-す、-せ」および「-を」をキーワード⁴に検索をかけ、該当するものを抽出、集計した数値を【表 2】に示す。

³ 「倍増する」は数詞と結合するとアクセントが変化するとも捉えられるが、ここでは形態と音韻のミスマッチと捉え、(A)に含んでおく。

⁴ 「-」は【表 1】に記した 35 語が入る。また、「-せ」は「せず」などの形式を想定している。

表 2 朝日新聞 10 年分における「-スル」「-ヲスル」「数詞-スル」「数詞-ヲスル」の頻度

	語	-スル	-ヲスル	数詞-スル	数詞-ヲスル
(A)	完投	318	0	3	1
	敬遠	1,171	1	3	0
	失策	21	20	8	3
	倍増	1574	0	10	0
	分冊	2	0	1	0
	分枝	3	0	2	0
	分裂	961	1	4	0
	連投	33	0	7	0
	連破	104	0	4	0
(B)	安打	72	0	403	0
	往復	546	0	103	0
	回転	694	3	78	0
	完封	406	1	1	0
	区分	251	1	5	0
	公演	215	1	1	0
	三振	126	10	20	1
	盗塁	22	7	14	2
	等分	24	2	315	0
	分割	809	2	169	1
	分類	1,167	8	58	0
	連勝	419	0	820	4
	連戦	7	0	2	0
	連打	111	1	37	0
	連覇	271	3	675	7
	連敗	269	6	418	3
連発	1,096	0	3	0	
(C)	会計	9	14	0	0
	会合	52	8	0	0
	競技	35	33	0	0
	編成	796	6	0	0
	継投	91	1	0	0
	授業	64	456	0	0
	区画	13	0	0	0
	連続	1,130	0	0	0
	施設	0	0	0	0

【表 2】の「-ヲスル」では、「単純な分裂をする」のように、二字漢語サ変動詞語幹が連体修飾節を承けているものはカウントしているが、「細胞分裂をする」のように、二字漢語サ変動詞語幹が他の要素と複合しているものはカウントしていない。また、「等分」については、「-ヲスル」ではなく「-ニスル」を取るが、【表 2】では「-ヲスル」で代表させている。

【表 2】で網掛けをしてある「完投」「連勝」は、単独の場合には「-ヲスル」の形での出現が確認されなかったが、数詞と結合した場合には「-ヲスル」の形での出現が確認された。しかし、「完投をする」「連勝をする」が許容されないとは考えられないため、今回の調査データでは、たまたま確認されなかったものと思われる⁵。

これを踏まえて、【表 2】を見ると、次の点を指摘することができる。

- 1) 単独で「-ヲスル」の形を取らない語は、数詞と結合しても「-ヲスル」の形を取らない
- 2) 数詞と結合して「-スル」の形を取らない語(=(C))は、「-ヲスル」の形も取らない

これに加え、先に述べたように、単独では問題なく「-ヲスル」の形を許容するにもかかわらず、数詞と結合すると、「-ヲスル」の形を取れなくなる語が確認された。用例を以下に示す⁶。

- (25) a. 空中で回転{を/Ø}して着地する運動です。 『朝日新聞 2004/11/13』
 b. 空中で3回転{??を/Ø}して着地する運動です。
- (26) a. 『『ハード』と『ソフト』に分類{を/Ø}する意味があるのは、唯一、首相の靖国参拝問題だろう』という声も聞かれる。 『朝日新聞 2006/5/11』
 b. 『『ハード』と『ソフト』に2分類{??を/Ø}する意味があるのは、唯一、首相の靖国参拝問題だろう』という声も聞かれる。

ヲの挿入、もしくは、「-ヲスル」から「-スル」への編入の条件に関しては、先行研究でも諸説挙げられているため、数詞と結合することで生じるこの種の質的变化については、今後、詳しく考察する必要があると言える。

3.2 助数詞化

数詞と結合した二字漢語サ変動詞語幹がスル以外の動詞の直前に生起しているものにつ

⁵ 「施設」については、単独でも「-スル」の用例が見られないことから、現代語ではサ変動詞の用法は衰退していると捉えることができる。

⁶ ヲの有無に関しては、先行研究でも、判断に揺れが見られることが指摘されているため、ここでの「許容されにくい」という判断は上述の調査において用例が見られなかったことを基準と判断し、用例が見られなかったものに「??」を付している。

いては、格助詞の省略と捉えられる場合が多い⁷⁸。

- (27) それより 00 年最多勝右腕のハドソンから 2 安打 {Ø/を} 放ったことを、イチローは喜んだ。 ((23)改)
- (28) 昨年度は 242 授業 {Ø/が} あった。 『朝日新聞 2004/6/6』
- (29) 東京都町田市の霊園内に 100 区画 {Ø/を} 設けた。 『朝日新聞 2003/8/24』

一方、次のような例は、格助詞の省略とは捉えられない。

- (30) **最新車両 N700 系**を 16 編成投入し、11 年度末で全 133 編成のうち 80 編成を N700 系にする計画だ。 ((24)改)
- (31) 路面電車とともに、昔懐かしい「坊っちゃん列車」が 2 編成走る。 『朝日新聞 2004/3/24』
- (32) JR 西日本は 17 日から 3 月 1 日まで **JR 東日本の山手線電車**を 1 編成借り切り、車内や車体の広告をすべて JR 西日本や西日本の観光地のものにする。 『朝日新聞 2005/2/16(一部改⁹)』
- (33) 八丈島には去年 9 月まで羽田からの直行便が毎日 4 往復あったが、観光の低迷で搭乗者数は減少してきた。 『朝日新聞 2006/2/9(一部改)』
- (34) 「端午の節句」の 5 日に、日本航空がパイロットから客室乗務員(CA)、整備士に至るまで、**男性社員**だけによるフライトを羽田—鹿児島間で 1 往復運航する。 『朝日新聞 2010/5/4』
- (35) 静岡県は**静岡—福岡**を 3 往復確保するため、日航と契約。 『朝日新聞 2009/10/23』
- (36) 左右のコンビネーションでロープに追い込むと、今度はとどめの**左アッパー**を 3 連発浴びせたところでレフェリーが割って入った。 『朝日新聞 2009/1/4』

(30)～(36)の用例において、下線部は数詞と結合した二字漢語サ変動詞語幹を、波線部は述語動詞を、太字で記した部分は数を表現される名詞(句)を表している。

これらの例については、数詞と結合した二字漢語サ変動詞語幹と述語動詞の間に格助詞を補うことができないため、「編成」「往復」「連発」は、数詞と結合したことで、それ単独では生起することのできない副詞的位置に生起できるようになったと捉えるほかない。

田中(2012)、および、それを発展させた田中(2014)は、日本語の助数詞を切り出すための

⁷ 以下、出典を記した用例に置換がある場合は、左を原典に統一する。

⁸ 「増える」「少ない」のような増減や多寡を表す動詞や、「合わせる」のような動詞の場合、格助詞を補うと解釈が変化したり、許容されなくなったりする場合がある。また、「続ける」のような動詞も同様である。これらは、数量の変化や在り方に関する動詞であると捉えられる。

⁹ 用例を見やすくするために、本文中にあった括弧書きを削除した。(33)も同様である。

基準として、(37)を提示している¹⁰。

- (37) a. 数詞の後ろに直結し、数量詞を成す
b. 数を表現される名詞と共起し、かつ、副詞的位置に生起する

(田中 2014:26)

(31)~(36)は(37)を完全に満たす。よって、「編成」「往復」「連発」の 3 語は助数詞化していると捉えられる。

このような観点を導入すると、格助詞の省略の例として挙げた(27)~(29)に、それとは異なるもう一つの解釈が存在することに気付く¹¹。すなわち、数を表現される名詞として、当該の二字漢語サ変動詞語幹を補った数量詞構文である。

(38) それより 00 年最多勝右腕のハドソンから {Ø/安打を} 2 安打放ったことを、イチローは喜んだ。 ((27)改)

(39) 昨年度は {Ø/授業が} 242 授業あった。 ((28)改)

(40) 東京都町田市の霊園内に {Ø/区画を} 100 区画設けた。 ((29)改)

同一の文に対する複数の解釈の存在は言語の変化に大きな影響を与えるものである。

なお、「編成」「往復」については、名詞と同じ形態を有する助数詞¹²を収集し、意味的に分類した東条(2014)にもリストされている。(C)に属している「編成」については、「編成する」の形では数詞と結合しないため、名詞から助数詞へと変化した可能性が高い¹³。しかし、「往復」「連発」については、「往復する」「連発する」の形でも数詞と結合するため、名詞から助数詞へという変化の道筋のみならず、漢語サ変動詞から助数詞へという道筋も考慮に入れなくてはならない¹⁴。このような語について、個別に研究を進める必要があると言える。

¹⁰ 助数詞を切り出す基準として「疑問詞「何(なん)」の付加」を挙げる研究も存在する(たとえば、東条 2014 など)。「編成」「往復」「連発」については、「何編成?」「何往復?」「何連発?」が問題なく許容されるため、この基準に照らし合わせても助数詞であると判断される。ただし、「何(なん)の付加」については、たとえば、「何回転する?」が問題なく許容されるように、助数詞とは異なる表現でも許容されるため、助数詞だけを切り出す基準としては十分ではないと言える。

¹¹ 数詞と結合した二字漢語サ変動詞語幹がスル以外の動詞の直前に生起していれば、必ず格助詞の省略と数量詞構文という 2 つの解釈を持つというわけではない。注 8 で述べたような動詞の場合、2 つの解釈の一方、もしくは、両方が成り立たないことがある。

¹² 東条(2014)の「準助数詞」に相当する。

¹³ もちろん、かつては「3 編成する」といった表現が存在していたが、現在は衰退しているという可能性はある。

¹⁴ 「塩を一撮み入れる」「刀を一振り預かる」など、和語動詞由来の助数詞は存在する。動詞から助数詞(量詞)への変化は中国語にも見られ(橋本 2009)、日本語よりも盛んに研究がなされているようである。

4 まとめ

本稿では、数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞の抽出、および、数詞と結合することで生じる文法的性質の変化という観点からの観察を行った。結果、26の数詞と結合可能な二字漢語サ変動詞が抽出され、①ヲの挿入が難しくなる、②助数詞化といった現象が観察された。

文法的性質の変化については、数詞と結合することですべての語に一律に生じる変化は確認できなかった。本稿での観察は、今後、このような現象にアプローチしていく場合には、個々の語に焦点を当てて分析を行っていく必要があることを示しているものと捉えることができる。本稿に記した観察がそのような研究の足掛かりになれば幸いである。

参考文献

- 金英淑 (2006) 「「VNする」の自他交替と構造」筑波大学博士(言語学)学位請求論文。
- 小林英樹 (2005) 「漢語サ変動詞の意味・用法の記述的研究－「販売(する)」、「売却(する)」などをめぐって－」『語学と文学』41: 21-28, 群馬大学語文学会。
- 田中佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲－名詞と助数詞の連続性－」『筑波応用言語学研究』19: 117-126, 筑波大学大学院人文社会科学研究所科芸・言語専攻応用言語学領域。
- 田中佑 (2014) 「近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着」筑波大学博士(学位)請求論文。
- 東条佳奈 (2014) 「名詞型助数詞の類型－助数詞・準助数詞・疑似助数詞－」『日本語の研究』10 (4): 16-32, 日本語学会。
- 野村雅昭 (1999) 「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行会 (編)『日本語研究と日本語教育』1-23, 明治書院。
- 橋本永貢子 (2009) 「動詞から量詞へ」『岐阜大学地域科学部研究報告』25: 27-37, 岐阜大学。
- 日向敏彦 (1985) 「漢語サ変動詞の構造」『上智大学国文学論集』18: 161-179, 上智大学。
- 廣濱文雄 (1965) 「複合してサ変動詞を作る漢字語の意味分析(1)」国立国語研究所 (編)『国立国語研究所論集2 ことばの研究 第2集』143-153, 秀英出版。
- 廣濱文雄 (1966) 「複合してサ変動詞を作る漢字語の意味分析(2)」『山邊道』12: 62-69, 天理大学国語国文学会。
- 楊高郎 (2011) 「自他両用の漢語動詞に関する研究」筑波大学博士(言語学)学位請求論文。

参照資料

- 『聞蔵Ⅱビジュアル』、朝日新聞社
- 『分類語彙表 増補改訂版』、国立国語研究所 (編)、大日本図書、2004年
(田中佑 二松学舎大学客員研究員)

A Survey on Expressions that Combine Numerals with Sino-Japanese Verbs of Two Chinese Characters

TANAKA Yu

Japanese uses expressions such as “3 *kaiten-suru* (*three rotations*)”, “3 *rensyo-suru* (*three consecutive victories*)”, “3 *ohuku-suru* (*three round-trips*)” that consist of a numeral combined with a Sino-Japanese verb composed of two Chinese characters. This paper examines these expressions by extracting them from the corpus and investigates the changes observed in the grammatical properties when a numerical is attached to the Sino-Japanese verb. 26 expressions were extracted from the corpus and it was observed that the insertion of case particle “*wo*” becomes difficult. The phenomenon of classifierization was also observed.